

## 消尽と救済としての物語(3)

神谷 英二\*

**要旨** 本稿は、「物語は消尽したものを救済できるか」を問う研究の第3部である。ベンヤミンが描いた都市テクストを分析対象とし、そのなかでも特に、「ナポリ」を重視している。この街の多孔性について語るベンヤミンの言葉は物語であるとともに証言でもあることが解明される。その過程で、多孔質なナポリそのものがベンヤミンの言う敷居であることが明らかとなり、遠ざかりつつもその敷居に留まり、「歴史の天使」の眼差しをもって街を凝視することでのみ、物語を語りうることが示される。また、同時に、デリダの署名を巡る議論を手がかりにして、物語における署名についても考究されている。最後に、ブランショの「忘却」と「中性的な語りの声」が次の研究テーマになることが予告される。

**キーワード** 多孔性 敷居 滞留 歴史の天使 署名 証言

### 1 はじめに：3日目の旅の始まり

「物語は消尽したものを救済できるか」を問う途上で、わたくしは無限に差異化する襞で編まれた1000フィートの逃走線であるエッフェル塔に出逢った。

エッフェル塔はたくさんの穴が穿たれた襞でできている。襞の中にはさらに小さな襞があるのだから、鉄のレースの襞も、より小さな襞に繰り返し何度も分割される。それは絶えず変化し、分岐し、変容を繰り返して、決して固定されることはない。

わたくしの思索は、こうしたエッフェル塔の

経験から、その襞と穿たれた穴によって構成される律動から、やはり穴に満ちた多孔質の(porös)ナポリへと必然的に向かう。

### 2 ナポリ、一方通行路を拓く技師とともに

ベンヤミンは、1924年にカプリ島でアーシャ・ラツイスと出逢う。これが彼にとって大きな転換点となり、『パサージュ論』への道を拓くことになった。その出発の場所は「ナポリ」である<sup>1)</sup>。

「幻想的な旅行記は、この都市にさまざまな色彩を与えてきた。現実にはこの都市は灰色で

\* 福岡県立大学人間社会学部・教授

ある。」(GS IV, 309)

灰色がかった赤、黄土色、白、そして全くの灰色。こうした色彩の空間では、色彩に乏しいがために、フォルムを把握できなければ、意味をもつものとして、この街を見ることすらできないだろう。それゆえ、ナポリのフォルムの本質を直観的に把握したといえる「岩めいている」との表現がここに現れる。

「この都市は岩めいている。呼びかけの音が上ってこない高処、サン・マルティーノ城から見ると、この都市は夕暮れの中で死に絶えて、岩塊へと癒合してしまったようである。ただ一筋の海岸線が平らに延びるだけで、その背後には建物が積み重なっている。七階、八階建ての賃貸住宅は、階段が上へ向かって走る基礎の上に立ち、邸宅群とは対照的に、摩天楼のような様子をしている。土台の岩そのものにさえ、それが岸辺まで届いているところでは、洞穴が穿たれている。」(GS IV, 309)

この地では、建てるとは建立というよりもむしろ穿孔である。そのため、穿たれた岩のフォルムがそのまま都市のフォルムとなる。この多孔質な街は、都市計画に基づいてテロスへ向かって完成をめざすというようなこととは全く無縁だ。「このような界限においては、どこでまだ建てられ続けており、どこで崩壊が既に始まっているのかを見極めることは殆どできない。」というのも、そこでは「完成されたり終結したりするものなど何もないからである。」(GS IV, 310)

しかしながら、ナポリが多孔的であるとは、実際に岩に住居や倉庫、さらには漁民相手の洞穴酒場などの穴が穿たれている、という事情のみを指すのではない。それは、自然と人為が相互に浸透しているというこの都市の基礎的な

フォルム=在り方をも示している。(大宮 2007: 28)

「岩塊と同様に多孔質なのが建築である。建物と行為とが中庭やアーケードや階段といった場では互いに乗り移るのだ。あらゆるところにひとは、予見できない新たな配置の舞台たりうる間隙を保持している。決定的なこと、型の刻まれたようなことは回避される。いかなる状況も、それがまさにそうであるとか、もうずっとこのままと考えられたようには眼に映らず、どのような姿も、それが『こうであって他ではない』ことに固執したりすることはない。」(GS IV, 309)

すなわち、多孔性 (Porosität) は「この生の法則であり、尽きることなく、新たに発見される。」(GS IV, 311) それゆえ、先に引用したように、「建物と行為とが中庭やアーケードや階段といった場では互いに乗り移る」のであり、「あらゆるところにひとは、予見できない新たな配置の舞台たりうる間隙を保持している。」

この多孔性は、暮らしのあらゆる面に見られる。氷の入ったガラス桶の中にある、香りのよい果汁。ナポリではこの果汁を飲むことで舌でさえも多孔性とはどういうものかを学ぶとまでベンヤミンは語る。「めいめいに配られているものであり、多孔的で、まぜこぜになっているのが私生活である。」そして、多孔質な「共同体生活が様々な流れとなつて、どんな私的な態度や行いをも貫いているのだ。」(GS IV, 314) ベンヤミンの育った北部ヨーロッパとは異なり、ここでは生きてゆくこと (Existieren) は、私的な問題ではなく、集団的な事柄である。したがって、家屋も人間にとってそこへと逃げてゆく避難所などではなく、人間たちが流れ出て

くる無尽蔵の貯水槽のようだ。さらに、この街では、「自然と人為」、「建物と行為」が相互に浸透し合っているだけでなく、「昼と夜」、「騒めきと静けさ」、「外の光と内の闇」、「道路とわが家」との相互浸透も見られるのである（GS IV, 315）。

ラツィスとともにベンヤミンによって、多孔質なナポリの姿がこのように語られる。

### 3 多孔性と敷居

それでは、多孔性の本質とも考えられるこの相互浸透は、ベンヤミンの敷居（Schwelle）の思想、「敷居学」[C5a, 2]とは異なる別の越境の在り方なのだろうか。敷居はそれを越えて相互に浸透したり、その上に留まったりすることができるものなのだろうか。あるいは多孔性と敷居は全く異質の概念なのだろうか。

多孔質なナポリでは、目立たない扉あるいは一枚のカーテンが秘密の入り口となる。それは、見落としてしまいそうな、ささやかな敷居である。

それに対して、ベンヤミンがベルリンで経験した敷居はこれとは全く異なるように見える強固なものではなかったのだろうか。ここで、『1900年頃のベルリンの幼年時代』の「ティーアガルテン」を紐解いてみよう。

「当時、私をじっと見つめていた女像柱たちや男像柱たち、天使像たちやポモーナ像たちのうちで、私のいちばん身近なところにいたのは、生（Dasein）に、あるいは家屋に踏みいるその一步を守護する、境界域（門）の事情に通じた一族の、あの埃をかぶった像たちだった。というも彼らは、待つことに熟達しているからである。そしてそうであればこそ、異郷の者を

待つのであれ、古き神々の回帰を待つのであれ、また、30年前に学校鞆を背にその足許を通り過ぎた子どもを待つのであれ、彼らには同じことであった。彼らの合図で、ベルリンの旧西区は、古代の西の国になった。」（GS VII, 395）<sup>2)</sup>

このカフカの『門』を連想させる強固な敷居。門前に門番が立つ掟の門。門番は「今はだめだ。」と言うものの、いつまでも入ることを許されぬ門。埃をかぶった像たちが守護する境界。こうした敷居だからこそ、「敷居の魔力」[I1a, 4]があるのではないのか。また、「敷居を越える経験」[O2a, 1]が神話と結びついていたのではないのか。

『ベルリンの幼年時代』の始まりは、「ロτζア」である<sup>3)</sup>。ベルリンという当時のヨーロッパ有数の大都会に生まれ育ったベンヤミンにとって、幼年時代の記憶の源泉となる場所として、Hofが特権的な位置を占めている。この特権的なHofは単に中庭だけを意味するのではなく、中庭に面したロτζアや停車場（Bahnhof）をも含んでいる。「都会が打ち開かれて、子どもを立ち去らせたり、再び迎え入れたりする場所は、さまざまなHofであった。」（GS VI, 503）

ロτζアは、住居の側面から外に突き出していない屋根付きのバルコニーのことであり、中庭に開け放たれ、上階のロτζアの床が屋根代わりになった空間である。ベンヤミンの記憶にあるロτζアでは、上階を支えているのは、古代ギリシア建築風の女像柱である。そこは邸宅の内部と外部の中間地帯である。ここもまた、ベンヤミンの越境する敷居のひとつである（Menninghaus 1986: 34）。

「私の幼年時代の思い出を何にもまして心優しく育んでくれたのは、中庭への眺めだった。」そして、成人となったベンヤミンの「想いの空

を支配している形象やアレゴリーたちも」、中庭の風のそよぎのなかに居並んでいたというのである (GS VII, 386)。

ここから分かるように、ベンヤミンは、「ロッキアの記憶に、子供にとっては決定的であったふたつの世界の見えない境界を掘りあてていた」(多木 2003a: 34) のである。そして、「ベルリンの人々の住むという営みは、ロッキアを境界としている。ベルリン、つまり都市神そのものは、ロッキアにおいて始まるのである。」(GS VII, 387f.)

ロッキアは敷居でありながら、邸宅の内部と外部の中間地帯として、人々はそれを越えてゆくだけでなく、そこに留まることができる。滞留が可能なのは、もちろん停車場などの他の Hof も同じである。

メニングハウスは、敷居を越える経験を「空間と時間の連続体における中間休止 (Zäsuren)」(Menninghaus 1986 : 8) と見做している。敷居で空間的にも時間的にも連続性は途切れる。しかし、そこでは、カフカの物語とは異なり、門番は都市の神話を理解する者には入門も滞留も許すのだ。それに加えて、人間だけでなく、形象やアレゴリーもそこに留まり続けている。

先に述べたように、多孔質なナポリは、ここでは外部と内部が流動化し、つねに相互浸透が起きているのだから、いわば、街全体がロッキアであり、停車場であり、敷居そのものなのである。それゆえ、ベンヤミンの「敷居学」が変容したのではなく、彼はラツィスの導きによって、街全体が敷居性を帯びる「ナポリ」を発見したと言えるのである。

#### 4 滞留と物語

敷居に留まらなければ、そこについて物語ることはできない。留まらずに何かを書くことができたとしても、それは情報や報告でしかない。大宮によれば、『『物語るひと』とはしかし、閾を跨ぎ越し終えてしまった者ではない。常に跨ぎつつある者、通過しつつある者である。すなわち『私』は、閾という異常域に留まるのであり、その帯域こそが彼の棲家ならぬ棲家である。』(大宮 2007: 246)

ベンヤミンにおいて、物語と経験は不即不離のものである。物語は口承という伝達の最古の形式のひとつである。情報とは異なり、物語は「純粋に出来事自体を伝えることをめざしてはいない」のであり、それは「出来事を報告者の生のなかに沈める。」なぜなら、その出来事が「経験として、聞き手に与えられるようにするため」である (GS I, 611)。

すなわち、柿木も指摘するように (柿木 2005: 39)、経験が貧困化し衰退する前にあっては、何かを経験するとは、自己が出会った出来事について、聞き手である他者の経験となるように他者に語りうることであった。ベンヤミンは、遠ざかる者でありながら、敷居に留まり、そこでの出来事を物語ることで、「事物の消滅」や「死の暴力」と和解できる (GS II, 453) とまで考えていたのだった。

しかしもちろん、「越境の人」ベンヤミンが書けば、全てが物語になるという訳ではない。「ナポリ」は物語と言えるのか。所詮は都市の情報や旅の報告に過ぎないのではないだろうか。

大宮も述べるように、「ナポリ」で展開される批評論は、1936年の物語論「物語作者 (Erzähler)」へ通じている。しかもそれは、

理論的な共通性があるだけでなく、「ナポリ」という旅のテキストそのものが、ベンヤミンの考える「物語」の形式を備えている。

『物語作者』では、レスコフを手がかりにして、「物語作者＝物語る者」という形象は、被造物の階段を上から下まで往還するとされる(GS II, 459f.)。「ナポリ」においても(他の都市を巡る旅行テキストにおいても)、彼の記述は神の祝福から人間、動物、魚介類を経て、最底辺の無機物たる「石」にまで至る。そして、レスコフは物語ることを自由な芸術などではなく、手仕事と考えていた(GS II, 447)。さらに、ベンヤミンは「完璧な職人は被造物の国の最も内奥の小部屋にまで入る術を得ている」(GS II, 463)と述べている。彼は、手仕事により完璧な職人たる物語る者として、多孔質なナポリに滞留し、物語によって、その「最も内奥の小部屋」の扉を叩いたのである。

## 5 「歴史の天使」の眼差し

「アーシャ・ラツィス通り」には、「歴史の天使」が彷徨っている。ベンヤミンがラツィスとともに「ナポリ」を描くのも「歴史の天使」の眼差しを通してである。

遊歩者こそが救済としての歴史事象の認識[N11, 4]を行う歴史の主体になりうる存在者であり、それは言わば、『歴史の概念について』に登場する「歴史の天使」(GS I, 697)なのであった(神谷 2009: 76)。

大宮も指摘するように、ベンヤミンの旅では、旅行者が遊歩者として訪問するのではなくて、遊歩者へ向かって街が到来する(大宮 2007: 9)。到来する街は、旅行者を別の時空として包み込みながらも、同時に退き続ける。この退き続け

る街を天使の眼差しはどのように掴まえるのだろうか。ここで、『アゲシラウス・サンタンデル』に現れる天使の姿に目を向けよう。

「天使は、しかし、私がこれまで別れざるをえなかったすべてのものに、人間たちに、そしてとりわけ物たちに似ている。私がもはや所有してはいない物たちのなかに、彼は棲まっているのだ。彼はそれらの物たちを透明にし、すると私には、そのひとつひとつの背後に、それを贈ろうとしたひとの姿が見えてくる。」「あの天使自身もまた、鉤爪と、尖った、いやまさにナイフのように鋭い翼を持ちながら、視野に捉えた者めがけて突進して行くようなそぶりは見せないのだから。彼はその者をしかと注視している—長いあいだ。それからひとはばたき、またひとはばたきと、だが断固として後退りしていくのだ。」(GS VI, 523)<sup>4)</sup>

こうした天使像がさらに深められたのが、『歴史の概念について』第IXテーゼである。

『『新しい天使』と題するクレーの絵がある。そこにはひとりの天使が描かれていて、それは自分が凝視しているものから、いままきに遠ざかろうとしているかに見える。眼は大きく見開かれ、口は開かれ、翼は広げられている。

歴史の天使はこうした姿をしているにちがいない。歴史の天使は顔を過去のほうへと向けている。私たちの眼には出来事の連鎖と見えるところに、彼はただひとつの破局を見ている。絶え間なく瓦礫のうえに瓦礫を積み重ねては、彼の足もとに放りだしている破局をだ。できることなら彼はその場にとどまって、死者を目覚めさせ、打ち砕かれた破片を集めて元通りにしたいと思っている。だが、エデンの園から吹いている強風が彼の翼を絡め取り、その勢いが激しいために翼を閉じることがもうできなくなって

いる。この強風は彼が背を向けている未来のほうへと、彼をとどめようもなく吹き飛ばしてゆく。そうしているうちにも彼の眼前では、瓦礫の山が天にとどくほどに高くなってゆく。<sup>5)</sup>

ナポリはいわば多孔質の瓦礫だ。「どこでまだ建てられ続けており、どこで崩壊が既に始まっているのかを見極めることは殆どできない」街。そこでは「完成されたり終結したりするものなど何もない」(GS IV, 310)。積み重ねられた瓦礫そのもの。しかし、それは決して灰ではない。まだ破局しない瓦礫の山。天使は、退き続ける瓦礫の街を、破片を集めて元通りにしたいと思うものの、この街にはそもそも元の姿などはない。自らも進歩という強風によって、未来という後方に飛ばされつつ、天使は街を凝視し続ける。これこそが、ベンヤミンが「ナポリ」や他の都市テクストを描いた際を目差しなのである。

## 6 物語る者の署名

誰が語ったのか。物語にとって署名はどういう在り方をしているのだろうか。

「物語には物語る者の痕跡が、陶工の手の痕跡が陶製の皿に残るように、残っている。」(GS II, 447) さらに、ヴァレリーの『コロエをめぐる』を引用して、芸術家の観察はその対象の名を無化するとベンヤミンは指摘する。その対象は「存在と価値を魂と目と手の間に生み出される、ある種の諧調からのみ受け取る。」(GS II, 463f.)

ここに、誰が語ったのか今となっては定かではない匿名性を帯びることも多い物語と、特定の法制度の中でなされた明確な一人称を伴う証言を繋ぐ道が拓かれることになる。しかしなが

ら、この「手の痕跡」とはいかなるものか。ある種の署名と考えられるものなのか。

デリダはサールとの論争の中で『署名、出来事、コンテクスト』において、特に「署名ども (Signatures)」と名付けられた節において、署名の効果の可能性の条件について集中的に議論している。わたくしはこれを手がかりにして、物語における署名の可能性について考える。

「定義上からして、書かれた署名は署名者の現勢的ないし経験的な非一現前を含意している。」しかし、書かれた署名はまた、「ある過ぎ去った今における、くおのれの現在のであった> (son avoir-été présent)<sup>6)</sup>を刻印してもおり、そしてそれを引き留めてもおく。」(Derrida 1990: 48f.) ところで、この過ぎ去った今は未来的な今としてもありつづけるだろうから、書かれた署名は「今性 (maintenance) という超越論的形式におけるくおのれの現在のであった>を刻印してもおり、それを引き留めてもおく」ということになる。「そうした一般的な今性が、署名の形態の現在のな、つねに明証的かつねに単独的な一点性のなかに、いわば書き込まれ、ピンでとめられている。これはあらゆる花押のなぞめいた独自性である。源 (source) への結びつきが起るためには、それゆえ、一つの署名という出来事ならびに一つの署名の形態の絶対的な単独性が引きとどめられているのでなければならない。つまりそこには、一つの純粋な出来事の純粋な再生可能性がなければならない。」(Derrida 1990: 49)

そもそもそのようなものは存在するのだろうか。もちろん毎日、署名という出来事は無数に生じ、その効果はこの世で最もありふれたものの一つである。とはいえ、その効果の可能性の条件が、同時にまた、その効果の不可能性の条

件でもあるという構造になっていることは重要である。

署名が機能するためには、誰の署名なのか読解可能であるためには、それは「一つの反復可能な、繰り返し可能な、模倣可能な形態をもっていなければならない。署名はその産出の現在のかつ単独的な意図から切り離されうるのでなければならない。署名の同じもの性 (mêmeté)こそが、署名の同一性 (identité) と単独性を変質させることによって、署名の封印を分割するのである。」(Derrida 1990: 49)

書かれたテキストには、こうした条件のもとに署名が物語にも証言にも同様に付されている。作者が不明となった、あるいは連綿と続く無数の語り手による口承の物語が文字に定着される時には「匿名という署名」がなされる。また、署名は話す場合にもなされる。口頭の発言においては、その本人が陳述を行なっている人物である。すなわち、発言源であることにより、暗黙のうちに参照され、署名がなされている。この参照は、口承された物語の場合にもなされるのであり、自己が出会った出来事について聞き手である他者の経験となるように他者に物語った者たちの痕跡が、それがたとえ「作者不詳」という刻印であれ、聞き手のもとに現れるのである。

## 7 物語と証言

こうして物語にも証言にも同じように署名がなされることが明らかとなった。それでは、ベンヤミンの「ナポリ」から始まる都市名を付した一連のテキストは、物語であるだけでなく、ある種の証言でもあるのだろうか。例えば、あの「マルセイユ」の「貝と牡蠣の屋台」を巡る

濃密な描写は、ベンヤミンが語る物語としてだけでなく、証言としても存在しているのだろうか。

ここで、わたくしはデリダのブランショ論『滞留』に目を向ける。そこでは、虚構、偽装、隠蔽、嘘、偽りの誓いの可能性を構造的に含まない証言はないと言われる。

「もし証言が禁じているように見えるこの可能性が実際に排除されたとすれば、それゆえ証言が証拠や情報、確かな事実、あるいは記録文書となったとすれば、証言は証言としての自己の機能を失うことになるでしょう。」(Derrida 1998: 31)

したがって、証言が証言であり続けるには、文学的虚構によって、少なくともその可能性によって寄生されるがままでなければならない。「私たちはこの決定不可能な境界の上に、留まろうと試みるのです。この境界は一つのチャンスでもありまた脅威でもあって、証言と文学的虚構、法と法でないもの、真理と真理でないもの、真実性と嘘、誓いへの忠実と不実、これらの両者はともにこの境界を頼みとしているのです。」(Derrida 1998: 31)

このようにして、証言はその内的な必然性によって、証拠でも記録でも事実でもないということになる。ここに恒久的に証言を秘密へと捧げる境界がある。「この境界は証言に対して、証言が明らかにし、公にするまさにそこで、秘密のままに留まるよう厳命します。私が語の厳密な意味において証言できるのは、私が証言していることを、誰も私の代わりに証言できないその瞬間においてのみなのです。」(Derrida 1998: 32)

この瞬間、証人以外の他の誰も証言できず、虚構、偽装、隠蔽、嘘、偽りの誓いが「ある」

とも「ない」とも証明しえない。

それでは、誰が証言しうるのか。証人になりうるのか。

「証人が誰にも代わりができない唯一の者であるべきところで、そしてまた証人が自己に固有の死を死ぬことのできる唯一の者であるところで、アウグスティヌスの表現を借りれば、真実をなすこと。それを約束するものとしての証言はつねに、虚構や偽りの誓いや嘘の、少なくともその可能性と固く結ばれているのです。この可能性が排除されると、どんな証言ももはや可能ではなくなり、いずれにせよその証言としての意味をもはやもたなくなってしまうでしょう。」(Derrida 1998: 28)

この考えのもとにいったん留まり、ベンヤミンの都市テクストを見れば、「誰も私の代わりには証言できないその瞬間において」、「固有の死を死ぬことのできる唯一の者」であるという在り方で、ベンヤミンは語り、書いていることがわかる。これこそまさに、「歴史の天使」の眼差しを通じた証言なのである。

## 8 忘却を語る中性的な声：次の旅のために

消尽からの物語による救済を語るこの研究にとって、「疲労の人」モーリス・ブランショが果たす役割は大きい。敷居に留まって物語ることとそこで語られる言葉について、ブランショが多くのことを教えてくれるだろう。本研究の次の旅程を見定めるため、ここではさしあたり、「忘却」と「語りの声」について見ておこう。

ブランショは、『終わりなき対話』で次のように述べている。

「見ることはおそらく、語ることを忘れることだ。そして、語ることは汲み尽くしえぬも

のである忘却を言葉の底で汲むことだ。」その際、「われわれはどんな言語でもよいような言語を期待しているのではない。誤ちが語っている言語、すなわち迂回の言語を期待している。」(Blanchot 1969: 40) (cf. 松浦 1985: 262f.)

また、彼は、『災厄のエクリチュール』では死と忘却について語っている。

「書くこと、それは、つねにすでに過ぎ去った死をもはや未来には置かないことである。そうではなく、死を被ることを受け入れることである。死を現前させず、また自らを死へと現前させずに。死が経験されなかったにもかかわらず、起こったのだということを知ること、死が残す忘却のなかで死を認めることである。その忘却の消え去っていく痕跡は、宇宙的秩序から自らを外すように呼びかける。災厄が現実的なものを不可能にし、欲望を欲望されざるものにするところで。

この不確かでつねに先行する死、現在なき過去の証し立ては、決して個人的なものではない。それが全体を逸脱するのと同様に。」(Blanchot 1980: 109)

また、デリダは、『滞留』でPassionを巡って、7本の軌線を語る3番目として次のように述べている。

「法と他者とに対する他律的な関係におけるある種の受動性をも含意しています。この他律性は、単に受動的で自由や自律性と相容れないというものではないのですから、問題となっているのは、受動性と能動性との対立の手前にある、あるいはその対立を超えたパッションの受動性なのです。しかしとりわけ思い浮かぶのは、レヴィナスとブランショがこの原受動性について述べていることであり、特にブランショがレヴィナスとは異なり、中性的なも



のや、『語り声 (voix narrative)』のある種の中性を分析しているところです。『語り声』というのは、人称なき声であり、あの語り手の声 (voix narratrice) というものをもたない声のことです。語り手の声の『私』は、それ自身として措定され、同定されるのですが。」(Derrida 1998: 26f.)

これらの言葉を先達として「忘却を語る中性的な語り声」を問い尋ねるのが、本研究での次なる仕事である。

(「消尽と救済としての物語(4)」へ続く。)

## 凡 例

ヴァルター・ベンヤミンの著作からの引用箇所は、括弧内にGSの略号の後に、以下の全集の巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で記す形式で示す。

Walter Benjamin, *Gesammelte Schriften*, Unter Mitw. von Theodor W. Adorno hrsg. von Rolf Tiedemann und Hermann Schweppenhäuser, Suhrkamp, 1972-1989.

ただし、『パサージュ論』(*Das Passagen-Werk*) 所収の草稿群については、整理番号により示す。

## 註

1) 『モスクワ日記』でベンヤミンは次のように書いている。「ある場所についてできるだけ多くの次元において経験をして、初めてその場所を知りえたことになる。それを自分のものにしたければ、四つのすべての主要点からその場所に近づかななくてはならないし、何より、同じく、その四つの地点すべてからその地を出発しなければならぬ。さもなければ、心

構えもできないうちに、自分の行く先々でまったく思いがけず三度も四度も、その場所を横切ることになる。」(VI, 306) スーザン・バック＝モースは、ナポリを『パサージュ論』に至る、こうした地点のひとつと解釈している。(Buck-Morss 1989: 25)

- 2) ベンヤミンは、1892年7月15日、ベルリン旧西区マクデブルク広場4番地に生まれた。この旧西区は、ティーアガルテンの南側一帯に広がっている。
- 3) アドルノ稿やアドルノーレックスロート稿とは異なり、ベンヤミン自身の編集した最終稿では、「ティーアガルテン」や「ムンメレーレン」ではなく、「ロジリア」が冒頭に置かれている。
- 4) ここでの引用は、1933年8月13日にイビザで書かれた第二稿による。
- 5) ここでの引用は、Walter Benjamin, *Werke und Nachlaß, Kritische Gesamtausgabe*, vol.19, Suhrkamp, 2010, 30-44.のテキストによる。
- 6) この引用でのく >は、意味を取りやすくするために神谷が補足したものである。

## 参考文献

- Beckett, Samuel (1952): *En attendant Godot*, Les Éditions de Minuit.
- Beckett, Samuel et Deleuze, Gilles (1992): *Quad; et, Trio du fantôme;...que nuages...; Nacht und Träume. Suivi de L'épuisé*, Les Éditions de Minuit.
- Blanchot, Maurice (1969): *L'entretien infini*, Gallimard.
- (1973): *Le pas au-delà*, Gallimard.
- (1980): *L'écriture du désastre*, Gallimard.
- (1994): *L'instant de ma mort*, Fata Morgana.
- (2000): *L'attente l'oubli*, Gallimard.
- Buck-Morss, Susan (1989): *The Dialectics of Seeing: Walter Benjamin and the Arcades Project*, The MIT

- Press.
- Deleuze, Gilles (1988): *Le pli, Leibniz et le baroque*, Les Éditions de Minuit.
- Derrida, Jacques, et al. (1985): *La faculté de juger*, Les Éditions de Minuit.
- Derrida, Jacques (1974): *Glas*, Galilée.
- (1986): *Schibboleth: pour Paul Celan*, Galilée.
- (1987): *Feu la cendre*, Des femmes.
- (1988): *Mémoires: pour Paul de Man*, Galilée.
- (1990): *Limited Inc.*, Galilée.
- (1998): *Demeure: Maurice Blanchot*, Galilée.
- (2003): *Parages*, Editions Galilée.
- (2009): *Demeure, Athènes*, Galilée.
- Menninghaus, Winfried (1986): *Schwelkenkunde, Walter Benjamins Passage des Mythos*, Suhrkamp.
- Nancy, Jean-Luc (1999): *La ville au loin*, Fayard.
- (2001): *Visitation, de la peinture chrétienne*, Galilée.
- 浅井健二郎 (1994): 『経験体の時間—カフカ・ベンヤミン・ベルリン』 高科書店
- 大宮勘一郎 (2007): 『ベンヤミンの通行路』 未来社
- 柿木伸之 (2005): 「経験の廃墟から新たな歴史の経験へ: 経験の可能性を探究するベンヤミンの思考をめぐって」、『比較思想研究』 32、比較思想学会、37-48
- 神谷英二 (2009): 「遊歩者・記憶・集団の夢—ベンヤミン『パサージュ論』による記憶論構築のために」、『福岡県立大学人間社会学部紀要』 17(2)、福岡県立大学人間社会学部、67-79
- 郷原佳以 (2011): 『文学のミニマル・イメージ—モリス・ブランショ論』 左右社
- 多木浩二 (2003a): 「場所と境界—ベンヤミン『1900年頃のベルリンの幼年時代』・空間の思考12」、『ユリイカ』 35(10)、青土社、30-39
- (2003b): 「街の名前あるいは都市の言語化—ベンヤミンにおける固有名詞・空間の思考13」、『ユリイカ』 35(11)、青土社、19-27
- 田中 純 (2000): 『都市表象分析 I』 INAX出版
- (2007): 『都市の詩学—場所の記憶と徴候』 東京大学出版会
- (2010a): 『イメージの自然史—天使から貝殻まで』 羽鳥書店
- (2010b): 「セイレーンの誘惑—ナポリ、カプリ、ボジターノ」、『10+1』 No. 21、INAX出版、2-11
- (2015): 「生態学的都市論のために—『ベンヤミンの方法』と多孔性」、石田英敬ほか編『メディア都市』 東京大学出版会、2015年、61-82
- デリダ、ジャック (1986): 『カフカ論—「掟の門前」をめぐって』 朝日出版社
- ベンヤミン、ヴァルター (鹿島徹訳・評注) (2015): 『[新訳・評注] 歴史の概念について』 未来社
- 松浦寿輝 (1985): 『口唇論—記号と官能のトポス』 青土社
- 守中高明 (2012): 『終わりなきパッション—デリダ、ブランショ、ドゥルーズ』 未来社

\* 本論文は、日本学術振興会・平成31年度科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金)・基盤研究(C) (一般)、研究課題名: モダニズム詩に現れる形象を導きとする集会的記憶に基づく「まちの物語」の哲学的研究 (研究代表者: 神谷英二、課題番号: 19K00037) による研究成果の一部である。